光の中に子供たちがいる

●大津市の障害児対策

その取組みの特色は、(1)健康センターや保健所による乳児健診（受診率100％）、(2)乳児と障害者の医療費公費負担、(3)公私立保育園・幼稚園への希望する障害児の全員入園等、保健・医療・保育・福祉を結合して実施したことにあります。障害児が保育園に入るまでも、更に入園してからも保母、医師、保健婦、発達相談員等のチームによって専門的立場から援助がされ、父母たちの相談にも応えています。このように障害児を含めた全ての子どもの発達の保障をめざす総合的な取組みがなされています。

●カズエちゃんの三年間の記録

これは、一人の障害児　カズエちゃんが、保育園という集団生活の中でどのように発達し、また彼女を取囲む子どもたちがどのように変っていくかを記録したものです。カズエちゃんの入園から卒園までの三年間の記録は、最初の一年目が〈第1部〉として、二年目の生活は〈第2部〉として、卒園を迎える三年目の生活は〈第3部〉として完成しました。この記録は、重症心身障害児の療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の製作に参加し、大津市の障害児保育の記録映画「保育元年」「続保育元年」「続々保育元年」を製作してきた綜合社（代表大野松雄）によって全く自主的に製作されたものです。

●大津市における新しい保育の実践

〈第1部〉
16ミリ・モノクロ
1時間40分

七四年四月、カズエちゃんは三才十ケ月。体重は二九・五キロ、体はどんどんふとっていくのに、手足の筋肉は弱く、前の年まで歩けず、まだ言葉もない。五月、新設の市立朝日ケ丘保育園に入園。友だちや保母との初めての出会い。まだ、皆のリズムの中には入ってゆけない。六月、大分しっかり歩けるようになる。遊戯も友だちや保母のを真似しながらついてゆこうとする。七月、とうとうすべり台にのぼれた。夏、プールに入ったり、びわ湖で泳いだり……いろいろ喋べるようになる。でも意味不明。秋は遠足、運動会。冬、ブランコも自力でこげるようになった。友だちにイタズラしたり、けんかをしたり、カズエちゃんはすっかりクラスの人気者だ。

再び春、カズエちゃんに言葉がでた！可愛い声で「ドッコイショ！」

●カズエちゃんの二年目

〈第2部〉
16ミリ・モノクロ
1時間40分

第2部は、カズエちゃんの〈話し言葉の獲得〉にテーマをしぼってあります。そこでは、一年目のように眼をみはるような外見上の変化は見当りません。しかし、カズエちゃんの体の動き、心の奥底での起伏……それらは周囲の子どもたちや大人たちとの関わりの中で、少しづつ〈言葉〉を形成してゆきます。そういう対応の中で、カズエちゃんの口からこぼれる〈言葉〉を、春・夏・秋・冬そして再び春の季節の中で注目すると、カズエちゃんの言葉の持つ意味、言葉の持つ内容が深まっていくのがはっきりと読みとれます。そして〈話し言葉の獲得〉という、発達の一つの側面が単なる言語学習だけではないことを、カズエちゃんと周囲の人びとが如実に示してくれます。

そして、カズエちゃんは、今、最後の保育園生活を元気におくっています。

●「わかれ」は「かどで」……

〈第3部〉
16ミリ・カラー
1時間46分

第3部は第二部を受けて、カズエちゃんに春から見られ始めた「みとうし」を持つ行動がどのように進むのか、そしてそれが「言葉」の獲得と発達、また他のいろいろな心身の発達にどのようにかかわっていくのか……をテーマとして七六年四月から七七年三月、つまり卒園までを記録したものです。

「みとうし」を持った行動は言葉と結びつく。カズエちゃんの口からさまざまな言葉が、さまざまな表情をともなって飛び出す。カズエちゃんに新しい行動様式を生み出させる。名づけて「中抜きの尻合せ」……。

七七年三月、卒園式。みんな毎日通った保育園に別れを告げる。今、みんなの新しい生活が始まる。カズエちゃんも近江学園へ。

「おわり」は「はじまり」……。「わかれ」は「かどで」……。

●これが保育なのだ――宮下俊彦（日本社会福祉大学教授）

ここは、どこにでもある平均的な保育園のようだ。保育者のかかわりも、ある時はきめ細く、ある時はさらっと流している。この二年間にカズエちゃんは確実に変った。足どりもリズミカルで力強い、まわりのものや人とのかかわりにもむだがなくなった。そして今は、ことばの収得という大問題に取組んでいる。これからがたのしみだ。もうことさらに、障害児保育などと言う必要もなさそうだ。これが保育なのだ。

●成長する人間のたくましさ――乾　孝（法政大学教授）

この映画の主人公は、いわば発達の遅れた一人の童女です。けれども、だからといって見ている方がつらくなるような映画ではありません。逆に、成長する人間のたくましさに、見ている側までを勇気づけ、さわやかな後味を残こす映画です。けれども、それは一個の生きものとしてのたくましさが自然に発現するということではなく、大津市の保育にかける歴史を地盤に、多くの人びとの努力に支えられて実現していくものだということがよくわかります。

●〝発達〟の本質を教える――岡崎英彦（びわこ学園長）

この映画は一人の障害児の一保育所での活動を通じて人間が成長し発達する具体的な様相を画き出している。その意味で、決して一人の障害児のケース記録というだけでなく、すべての子どもの発達にとって、共通の、最も本質的なかかわりを示したものとして大きな意味をもつと思う。子どもたちの教育や指導にかかわる人びとのみならず、全ての人に観てもらいたいものである。

●原点の笑い――田村一二（社会福祉法人大木会理事長）

この映画の主人公カズエちゃんが障害を持ちながら尚且つ意欲の発生という神秘とも思われる姿を見せはじめたのは、いろいろな子どもの中に混在して、泣いたり泣かされたり極めて「自然」な状態で練られたせいではなかろうかと思われる。そしてこの映画をみながら実に度々笑った。しかしそれは嘲笑、冷笑、苦笑、憫笑、気兼笑いというような屈折された笑いではない。まことに明るい素直な笑いであって、これは教育だけでなく、いろいろな物事の原点に於てはこういう笑いが出てくるのであろうと思われる。